

連合東インド会社と生糸

栗原福也

はじめに

連合東インド会社（オランダ東インド会社）が総督オラニエ公マウリッツの親書とともに派遣したローデ・レーウ・メット・パイレン号およびフリフーン号の二隻は一六〇九年七月一日、肥前の平戸に入港した。両船の上級商務員アブラハム・ファン・ブルック、ニコラス・ポイクは駿府で家康に謁見し、総督マウリッツの親書を渡し、家康から総督への返書とともに通商許可の朱印状を与えられた。兩名の平戸帰還後、ローデ・レーウ・メット・パイレン船上で会議が開かれ、平戸への商館設置とヤックス・スペックスを商館長とすることが決議され、ここに幕末までの三百五〇年間にわたる日蘭貿易の幕が切つて落^①とされた。

一六〇九年から二一年に至る（一六一二—一四年を除く）商館

長スペックスの時期はオランダ船の来航も少数かつ不規則で、期待した貿易額も利潤もあげられなかった。この時期は東インド会社自体も草創期で既得の強大な商権を誇るポルトガル人、欧米人渡航以前から活発な貿易活動を展開してきた中国人を初めとするアジアの諸民族、オランダ人と同じころアジアに進出したイギリスなどのあいだに東南アジアの海域で激しい競争を繰りひろげている最中であつて、日本市場をめぐる争いもそのような競争の一端を形成していたことは疑いない。東インド会社は、当時の日本市場で最大の需要のあつた中国産白糸（生糸）を、明朝の外国貿易禁止のため、中国から直接に調達するといふことができなかったことも決定的に不利であつた。^②一六二三年、会社はタイオワン（台南市外港、安平）に砦を築き、同港に來航する中国人ジャンク船から生糸を買い^③つけることによつて、対日貿易の橋頭堡を確保することに成功した。オランダ船の生糸供給能力は一六二四年

表一 1636年度平戸オランダ商館輸出品構成表

輸		入	
品目	価	額	(百分比)
生絹	f.	921,298:7:6:	(59.43)
織織	f.	327,619:10:-:	(21.13)
毛織	f.	83,410:5:8:	(5.38)
綿	f.	18,279:16:12:	(1.18)
麻	f.	8,029:9:-:	(0.52)
皮	f.	86,785:8:-:	(5.60)
蘇	f.	20,324:1:10:	(1.31)
砂	f.	33,795:12:8:	(2.18)
香	f.	24,628:7:13:	(1.59)
象	f.	10,364:2:8:	(0.67)
金	f.	11,334:14:12:	(0.73)
雜	f.	2,963:8:10:	(0.19)
會	f.	10:8:-:	(0:00)
獻	f.	1,398:6:-:	(0.09)
計	f.	1,550,241:18:7:	(100.00)

〔註〕 出典は *Negotie Journael 1636*. 及び *Ditto 1637*, 1636年中に入航した船9隻の積荷・帰荷を対象とする。但しフロル号のトンキン向の帰荷を除く。
加藤栄一「元和・寛永期における日蘭貿易」(北島正元編『幕藩制国家成立過程の研究』所収) 56頁より引用。

までまことに少量であったが、翌二五年には俄然、前年度に十倍する量となり、さらに台湾事件による貿易停止期間(一六二九—三二年)を経て一九三五年には十萬斤の大台を突破してピークに達し、絶頂期は四一年のオランダ商館長崎移転まで続いた。生系の輸入量は以後五分の一以下に減少する。

一六三五年以後における生系の輸入増加は直接には会社が対日貿易の前進基地としてタイオワンを確保したことに負っていた。すでにイギリス人は平戸を引きあげ(二三年)、三三年(寛永十年)、日本人の海外渡航禁止とキリスト教禁止によって朱印船は東アジア市場から姿を消し、ポルトガル人もまた禁令以後数年のうちには追放され、台湾事件は五年ぶりにいまや最終的な解決をみて、日蘭関係はきわめて順調となり、オランダ東インド会社は中国人とともに日本の対外貿易を二分することになった。一六三五年からオランダ東インド会社の長崎移転の年である一六四一年に至る日蘭貿易の絶頂期は、他面においてわが国鎖国体制の完成するきわめて興味深い時期でもあった。⁽⁴⁾

周知のように、オランダ船、中国船のわが国への輸入品のうち、常に首位を占めていた商品は生糸、絹織物であった。たとえば加藤栄一氏が平戸オランダ商館「仕訳帳」から作成された「一六三六年平戸オランダ商館貿易品構成表」(表一)によれば、生糸・絹織物が全輸入商品に占める比率はそれぞれ五九・四三%、二一・一三%で、両者合わせると約八割に達していた。なお、岩生成一氏は中国船舶載生糸の数量とオスカー・ナホッド氏の挙げたオランダ船舶載のそれとを比較され、一六三七年(寛永十四

年)から一六八三年(天和三年)に至る四七年間に、前者の一年平均船載量が一一一、八〇八斤余、後者が七五、六五四斤余(すなわち中国船の六割二分)、ただし一六四四年ごろまで後者の方が多量で、同年ごろから両者の多寡の比が転倒したこと、しかし両国船で日本に船載された生糸の数量は年平均二一〇、二三〇斤余で、鎖国以前ポルトガル船や朱印船参加時代より幾分減少したようにみえると述べられる。⁽⁵⁾

オランダ船が日本に船載した生糸は中国船によってタイオワンにもたらされた中国産生糸が多く、ほかにコーチシナ(広南、東京)産生糸、のちにはベンガル産生糸がオランダ船で直接またはタイオワン経由で船載された。他方、アジア産の生糸や絹はすでに以前からイスラム人によってレヴァントの諸港まで運ばれ、続いてポルトガル人、スペイン人、さらにオランダ人、イギリス人によって、大量にヨーロッパへ輸入された。⁽⁶⁾アジアにおける生糸の産地は大別すれば中国、ペルシア、ベンガルの三つの地域にまがっており、したがってわれわれの考察する十七世紀においても、オランダ東インド会社は国際商品たる生糸をめぐってアジア地域における生糸の買付けだけでなく、西ヨーロッパ市場における販売においても猛烈な競争とそれに伴う不安定な地位にさらされていた。⁽⁷⁾本稿では諸家の研究によって、オランダ東インド会社によるわが国への生糸輸入の背後で、生糸の獲得をめぐってどのようなドラマが展開されたかを展望してみたい。

註

- (1) O. Nachod, *Die Beziehungen der Niederländischen Ostindischen Kompagnie zu Japan im siebzehnten Jahrhundert*, Leipzig, 1897. オスカー・ナホッド著、富永牧太訳『十七世紀日蘭交渉史』養徳社、一九五六年。九二頁以下。
- (2) 平戸商館長レオナルド・カムプスは一六二二年九月十五日平戸発バタビア宛報告で、毎年日本で販売されている中国商品の目録を作成し、生糸輸入量を三〇〇〇ピコル(三〇万斤)としている。ナホッド著、上掲書三四頁および一二一頁。岩生成一氏によれば、当時の日本市場に輸入された生糸総量は二十数万斤から四十万斤に上り、四十万斤にも上ると供給過多で糸価下落の原因になった。岩生成一「近世日支貿易に関する数量的考察」『史学雑誌』六二―一一二六七頁。
- (3) タイオワンへのオランダ商館建設とそののちの台湾事件については永積洋子訳『平戸オランダ商館の日記』第一輯、岩波書店、一九八〇年の序文参照。
- (4) 加藤栄一「元和・寛永期における日蘭貿易―鎖国形成期における貿易銀をめぐって―」(北島正元編『幕藩制国家成立過程の研究』吉川弘文館、一九七七年)五七三頁。
- (5) 岩生成一氏前掲論文、二七―二九頁。
- (6) この問題については N. Steengard, *The Asian Trade Revolution of the Seventeenth Century, The East India Companies and the Declin of the Caravan Trade*, Chicago

and London, 1973. を参照。

(7) K. Glamann, *Dutch-Asiatic Trade, 1620-1740*, Copenhagen and The Hague, 1958. pp. 112-131.

(一) 中国産生糸

東インド会社と生糸について、『オランダのアジア貿易』の著者K・グラマン氏は興味ある事件からその叙述を始めている。⁽¹⁾すなわち、一六〇三年二月二五日、オランダ東インド会社の派遣したヤコブ・ファン・ヘームスケルク提督がジョホール沖合で拿捕したポルトガルのカラック船「サンタ・カタリーナ」号はオランダ国内の価格にして二百二十五万グルデンを越える千二百バールの生糸を積載していた。生糸は翌年夏アムステルダムで競売に付されたが、たまたまイタリアの蚕糸が不作だったために、競売は圧倒的な成功を収め、ヨーロッパ中から買い手が集った。アムステルダムはこの競売をきっかけにもっとも重要な生糸市場として登場した。したがって東インド会社成立直後から、生糸は胡椒、香料と並んでもっとも望まれる帰り荷となった。一六〇八年、十七人会がアジア貿易について述べた訓令には、可能ならあらゆる手段によって対中国貿易を増大させ、なによりもまず生糸を入手すべし、中国との直接貿易が不可能ならば、例えばパタニのように中国人が交易にやってくる港で生糸を購入すべしと述べられている。同じ訓令は、ペルシアで生糸を買いつける途を開くために、オルムズの太守と対ポルトガル同盟を結ぶよう勧告している。

中国生糸はアムステルダム市場において、イタリア産はもちろんペルシア産の生糸に較べ品質・価格ともはずぐれ、販売価格は仕入れ値の三倍余りときわめて有利な商品だったが、⁽²⁾東インドからの輸入は不規則なうえ一六二〇年代初頭まではその量も六千斤を越えなかったであろうとグラマン氏は推定する。オランダ東インド会社は胡椒・香料貿易に成功し、ことに香料(チョウジ、ナツメグ、メイス)のほとんど唯一の生産地たる香料諸島を占領して十七世紀後半には香料貿易の独占的地位を確立することができたけれども、生糸貿易の場合には、日本市場への輸出がオランダ国内への輸入に優先したこともあって、必ずしも成功しなかった。対日生糸貿易について言えば、ポルトガル人がマカオを根拠地として日中間の生糸貿易に確固たる優越的な地歩を占めたのに反して、生産地である中国との直接取引ができなかったオランダ人は、第一に東アジア地域諸港における中国船との出会貿易によって生糸を入手しなければならず、その際わが朱印船貿易家との激しい競争にさらされ、第二に十七世紀前半における中国船、ポルトガル船によるマニラへの生糸輸入の盛行を切り崩さなければならなかった。

遠く永楽、宣徳二朝のころ鄭和の率いる大艦隊によってペルシア、アフリカ東海岸に及ぶ南海経営を行なった明朝の対外政策はそののち次第に消極的となった。しかし、明朝の貿易統制と海禁政策はかえって嘉靖年間(一六二二―一六六六年)の大倭寇に多数の中国人を参加させ、あるいは浙江、福建、広東地方の貿易商人に官憲黙許のもと盛んな私貿易を行わせるに到り、ついに六七年に

は民間商船の海外渡航が公許された。中国商人は西欧人の東洋渡航以前からコーチシナ、カンボジャ、シヤム、マライ半島東側の諸港から西はマラッカ、南はインドネシアにまで渡航し、生糸、絹織物、綿布、磁器さらに麝香、大黃、真珠、金、銀などと交換に胡椒、香料、白檀などを入手して帰航した。

他方、明朝の嚴重な対日海禁の結果、十六世紀後半以降わが国と中国との貿易を独占したのはマカオのポルトガル人であつて、彼らは主として中国産の生糸、絹織物をわが国に舶載し、銀と交換して帰航した。しかし、一六〇〇年以後生糸をめぐる日本市場の情勢は一変した。すなわちゼズス会巡察使バレンチン・カルバリョの報告（一六一五年二月八日附マカオ発）によれば、「一六〇〇年及び一六〇二年には、日本人は余り海外に渡航しなかつた。唯々数隻マニラに麦粉を輸出したに過ぎなかつた。一六一二年にポルトガル船は僅かに一、三〇〇キンタルの生糸を輸入したが、他の商品のことは暫く措いて、日本のジャンク船や、マニラ船と中国船によつて、五、〇〇〇キンタルも輸入された。これがポルトガル人が従前のようには重視されなくなった重要な原因である。殊にコーチシナに於ては、大いに障害となる貿易が開始された。すなわち中国人は多量の生糸を同地にもたらし、日本人は来つてこれを購入し、他のジャンク船に積取つて日本に帰るようになった。⁽³⁾」

一六〇〇—〇二年はあたかも関ヶ原役を経て江戸幕府の基礎が成り、朱印船制度が創設されたところで、このころを転機として、コーチシナやマニラに赴き中国船が舶載した生糸を買い付けて持

ち帰るわが朱印船貿易が躍進した。他方、中国船も生糸を舶載して直接わが国へ来航し始め、カルバリョ神父の報告にあるように、日本市場への生糸輸入におけるポルトガルのシェアは一六一五年ともなれば六、三〇〇キンタル（六三万斤）のうち僅かに一、三〇〇キンタル（一三万斤）と激減したのみならず、供給過剰によつて惹き起こされた生糸価格の下落、ときに暴落はポルトガル船の日本貿易に大きな打撃を与えた。⁽⁴⁾

中国生糸をめぐる商戦は日本市場においてだけでなく、海外の買い付け市場においても激化した。すでに一五九五年ポルトガル人の神父がフィリピン総督に送った書信に、「マカオの人々は日本船が屢々マニラに赴き、其の地から生糸及び其の他の商品を持帰らんと欲して、其の結果彼等の（日本へ）舶載する品々の値が下落するのを見て、之を妨害せんと大いに努め、陛下に対して、其の事が正当なりや、將又日本人に対する権利を妨ぐるものなりや否やを訴願せんとした」とあり、マニラに渡航する日本船が、中国船の同地に舶載する生糸を積み帰り、ポルトガル人の日本貿易を圧迫したことを述べている。日本船のマニラ貿易はそののも活発に行なわれてマニラにおける生糸価格を騰貴させた結果、日本人はイスパニア人の買い入れが済むまで許可すべからずという規定が設けられ、日本の貿易船数は一カ年六隻（一六〇二年）、さらに四隻（一六〇八年）と制限され、翌年にはついにフィリピン群島から日本への貿易、通商および航海は同群島の市民のみに限り、日本人の来航を禁止する厳令が發布される始末であつた。中国生糸の買い付けに當つては、中国人およびマカオに拠るポ

ルトガル人がもっとも恵まれていたことは言うまでもないが、わが朱印船も彼らの後塵を拝していたわけではない。岩生氏は朱印船が生糸や鹿皮などの買い付けに当り、海外市場で指導的地位を維持しえた原因についてつぎの三つを挙げられる。

(イ) 朱印船は、中国人等の熱望する銀資本を豊富に携行し、彼らとの取引を永年慣行してきたこと。

(ロ) 朱印船の渡航先各地には日本人の移住する者多くして、直接奥地各地に分散せる土着生産者から、製品を、朱印船の帰帆に間に合うように短期間に多量に買い付け集荷し得たこと。

(ハ) 朱印船関係商人は貿易品に精通し、かつ母国市場におけるその売捌きに習熟して、母国市場と海外市場とを緊密強固に連繫しえたこと。⁽⁵⁾

このようにして、トンキン、広南、シャム、カンボジャ、パタニなど南洋各地の港湾にひとたび朱印船が入航すると、市況はとみに活況を呈し、日本向け商品はにわか騰貴し、ついには払底して外来欧州人の取り引きに多大な障害となるほどだった。したがって遅れて東南アジア市場に参入したオランダ、イギリスが生糸貿易に割り込むのは容易でなかった。ただし、イギリス東インド会社がまだ前近代的な規制組合から脱していなかったのに対して、オランダ東インド会社はすでに史上最初の株式会社として強固で永続的な組織と資本集中を実現し、国家的な保護と特権のもとに質量ともにすぐれた船隊を動員することができ、しかも祖国はスペインおよびポルトガル(一五八〇—一六四〇)のあいだ、ス

ペインに併合)と交戦中で、新興独立国の意気に燃えていた。

オランダ東インド会社が設立当初から対日生糸貿易に大きな関心を持っていたことは疑いない。一六〇五年、会社はコルネリス・マテリーフ、デ・ヨングの率いる十一隻の大船団をアジアに派遣したが、この船団の主目標は香料諸島であり、同時に中国と日本も眼中に置かれていた。この大船団は翌年ポルトガルの要砦マラッカを包囲し、救援にかけつけたポルトガル艦隊と壮絶な大海戦を敢行し、さらにモルッカ諸島に向った。船団のうち四隻は中国との通商を求めて広東港に到ったが(一九〇七年)、空しくパタニに引きあげた。中国との交渉が成功した場合、中国に設立するオランダ商館を支配し、生糸、絹織物を舶載した船を日本に向けて送る役を受け持っていたエラスムス号上の上級商務員ヴェクトル・スプリンケルは一六〇八年二月十四日付の家康宛書簡を認め、つぎのように述べている。⁽⁶⁾すなわち、「……提督艦オラニエ号、ミッデルブルフ号、マウリテウス号、エラスムス号の四隻は、ポルトガル人その他諸国人同様貿易を営むため、巨額の資金並びに需要貨を舶載してシナ王国行きに定められ、私自身は貿易の許されうる限りその地に滞留し、生糸及び絹物をつみ一船を先ず日本に遣わすべきことを私の筋書に定めていたのでございませぬ。そのみではございません。旅程を促すために、私どもは船とともに広東河口まで参り、広東より凡そ十五哩のラントウ市(南大島)の前面に碇泊いたし、ここにて同市の官吏又は長官を覓め、贈物をなして、彼らより広東大官宛種々推薦状を手合せんといいたしたのでございます。然るに返事はえられず……。」と。

中国との直接取引に成功しなかったオランダ人は、シヤム、カンボジャ、広東、東京などに中国人の舶載する生糸を買い付けるか、ポルトガル船、中国船、朱印船を海上で襲撃し、積荷を捕獲するほかはなかった。しかしシヤム、広南では日本人居留民の協力をえて買い付ける朱印船には太刀打ちできず、マライ、インドネシア地域は中国から遠距離にあるため、中国人は長い航海による危険負担を好まず、むしろこれに較べて近距離で、しかも生糸需要の多いマニラとの通商を選んだ。海上での掠奪についていえば、朱印船や中国船の掠奪は日本で不評を招き、ポルトガル船との戦闘の場合は大艦隊が必要でしかも危険もつきまとうというわけで、平戸商館長ヘンドリック・ブルーワーはすでに一六一三年二月十三日付総督宛書簡で、もしオランダ人が中国で自由貿易を行なえない場合は日本貿易の利益は期待できないので、台湾に商館⁽⁷⁾を設け、台湾を仲継基地にすべきことを提案した。一六一六年商務員レオナルド・カムプスが平戸からアムステルダム⁽⁸⁾の支配人に送った書簡にも、日本貿易はさ程称讚の価値あるものではなく、オランダから舶載した商品は売れ残って倉庫に貯蔵され、中国商品は相当な利益となるが、マカオから来るポルトガル船が幸いにして拿捕されて後にこそ初めてその成果を期待しうると悲観的意見が述べられている。一六二一年平戸商館長に就任したカムプスは日本に永く滞在するにつれて悲観的意見を棄て、バタビア総督への書簡で、ポルトガル人の地位を奪いイギリス人を排除することによって、中国商品の日本への輸入に利潤を期待しうると述べるが、ただし中国商品の購入に当たっては従来およそポルトガル

人が支払った額より二〇パーセント以上多く支払わねばならないだろうと付け加えなければならなかった。⁽⁹⁾

一六二〇年代に入ると平戸のオランダ商館にとって明るい展望が開かれた。すでに一六一四年の布告で家康はキリシタン宣教師を神敵の敵と宣言してその追放、教会の破壊などを定めた。ポルトガル人、スペイン人に対する弾圧はそののちますますきびしさを加え、また一六二三年イギリス人は日本商館を閉鎖した。これに反し、同じ年、オランダ東インド会社はかつてヘンドリック・ブルーワーが提案した台湾進出を実現し、二五年には対日生糸貿易を一挙に躍進させ、幕府との友好関係を増進させることにも成功していた。タイオワンを生糸獲得の根拠地として中国船との出会貿易を行なうオランダ東インド会社にとって邪魔者は以前からの地に來航していた日本の朱印船貿易家であり、対日生糸貿易に有利な地位をえようとする東インド会社が朱印船貿易家を排除しようとして弾圧した結果、一六二八年ついに台湾事件を生んだことは周知のことからである。他方、中国生糸の獲得を一層効果的に実現しようとするオランダ人にとって、中国船あるいはマカオのポルトガル船によるマニラへの生糸輸出の阻止が大きな目標であった。

註

(1) K. Glammann, *op. cit.*, p. 112.

(2) M. A. P. Meilink-Roelofs, *Asian Trade and European Influence in the Indonesian Archipelago between 1500*

and about 1630, The Hague, 1962. p. 263.

- (3) 岩生成一、上掲論文、二六頁。
- (4) 岩生成一「朱印船の貿易額について」〔史学雑誌〕五九
一九一—一八頁。
- (5) 同上、二三頁。
- (6) オスカー・ナホッド、上掲書、三〇一頁。
- (7) 同上、一〇二頁。
- (8) 同上、三三二—三三頁。
- (9) 同上、一二二頁。

(二) マニラ・アカプルコ・セビリヤ

フィリピンは古来金の産出をもって聞こえ、スペイン人渡航以前から中国人、イスラム人、日本人が低廉な金を求めて貿易を行なってきた。⁽¹⁾一五六四年、メキシコを發ったミゲル・ローペス・デ・レガスピ率いるスペインのガレオン船隊は翌六五年セブ島に到着してフィリピン征服を開始し、七一年ルソン島に要塞都市マニラを建設した。一五四五—一五八年のあいだ西ヨーロッパの胡椒・香料の価格は他の商品に較べていちじるしく急騰したが、F・ブローデルによればポルトガルの胡椒貿易に対するイスラムの反撃が功を奏し、ペルシャ湾、紅海から東地中海への伝統的な香料のルートが再開したからであって、胡椒のひどい不足はポルトガルからこれを買入れる国々を悩ませ、香辛料価格の高騰したことがレガスピの遠征の前提条件であった。⁽²⁾

目指すフィリピンはミンダオ島に僅かの肉桂を産するのみで、香辛料に乏しかったので、スペイン人は香料を求めてモルッカ島に接近しようとしたが、ポルトガルの反撃を受け、ついにフィリピンを香料貿易の根拠地とするレガスピの期待は裏切られた。しかし、香料貿易に挫折したレガスピの眼前に中国生糸と新大陸銀の交易が無限の利益を生み出す可能性を孕んでたち現われた。六九年、彼は国王に対して香辛料への期待を棄て生糸貿易を優先することを提案した。新大陸産の安い銀を銀の高いアジアに舶載することがフィリピンのスペイン人にとってきわめて有利だったことは言うまでもない。

七一年、スペイン人がマニラに城壁都市を建設して集住すると、中国商品なかならず生糸を携えた中国船の来航は年とともに盛んになった。スペインのガレオン船(約三〇〇トン)は毎年アカプルコからマニラに來航し、六月中旬—七月中旬のあいだにマニラを出航する。船は黒潮に乗り、日本列島を左に見ながら北緯四〇度近くまで北上し、右旋回して北緯三五度附近でアメリカ海岸に達し、カリフォルニア海岸を南下してアカプルコに帰還する。往路は八—十週間の平穩な航海だが、帰路は四—七カ月を要し、嵐と渴きと栄養不足、壞血病としらみに苦しめられ、死者は乗組員の三〇—四〇%ときに六〇—七五%に及び、航海期間が七カ月以上にもなると舷側に小さな十字架が立ち並び、幽霊船さながらの有様だった。⁽³⁾

中国からマニラへは僅かに十日間の航走で足りたので、三月から六月初旬までのシーズン中にジャンク船で数回の往復が可能で

あった。⁽⁴⁾ 一般に東洋では金の銀に対する価格は欧州に較べて低廉であり、ことにフィリピンではそうであった。早くから金を求めてこの地に渡航した中国人にとって金銀の交易は有利だったに違いないが、他の中国商品すなわち生糸・絹・綿布・磁器・家具・食料品の舶載がいつそう有利であった。そしてスペイン人のマニラ建設と新大陸産銀の流入の増大とともに、中国人は次第に金の代りに銀を搬出するようになった。一五八六年、マニラからフェリペ二世への書信で、ペドロ・デ・ロハスは、毎年フィリピンから中国へ持ち去る銀は三〇万ペソに達し、本年は五〇万ペソ以上になると述べ、一六〇二年のフライ・マルティン・イグナシオ・デ・ロヨラの通商に関する意見書にはヌエバ・エスパニーニャとペルーからフィリピンへ毎年二〇〇万ペソの銀が送られ、これはみな中国の所有に帰すると述べられる。⁽⁵⁾

十六世紀後半からは、日本人もまた小麦粉、銀、武器などを携えてフィリピンに航行し、金・蜂蠟と交換し、やがて中国人がマニラに舶載する生糸、鹿皮、蘇木やスペイン渡来の珍奇品と交換するに至った。⁽⁶⁾ 他方、スペイン人のマニラ占領以前、モーロ人（イスラム教徒）の貿易活動が盛んだったが、スペイン人はモーロ人と敵対したので、フィリピン諸島におけるモーロ人の貿易活動は次第に衰微した。⁽⁷⁾

他方、マニラ貿易はヌエバ・エスパニーニャ、ペルー副王領にも大きな影響を与えずにはおかなかった。十六世紀前半、北方副王領の太平洋岸の港としては北部のラ・ナビタ、南部のウアトゥルコがあった。ラ・ナビタおよびその南のコリマの地域には多数の

インディオが定住しており、ラ・ナビタは豊富な労働者を利用して太平洋岸随一の造船町であった。（コリマの金・銀採掘は十六世紀中葉までに周辺のインディオ住民数を八〇%減少させた）。一五四二年、モルツカ諸島の征服を目ざしたビリャロボスの率いるスペインの大遠征隊はラ・ナビタの盛んな造船業によって可能となった。⁽⁸⁾

しかしながら、銀を運び中国の商品をもたらすマニラ船団の出入港はすぐにラ・ナビタから首都メキシコ市により近い良港アカプルコに移った。⁽⁹⁾ 言うまでもなくメキシコは北方副王領の政治、宗教、軍事、文化の中心地であり、本国スペインとの貿易と植民地産業を握る経済活動の拠点であった。中国商品の顧客は苛酷なインディオ収奪によってエル・ドラードの豊かな財宝をかき集めたコンキスタドールズ、莫大な報酬を得る植民地行政官、高級聖職者、急成長する植民地市場で一攫千金の野望を満たしつつある大商人たちから成る植民地貴族であった。それだけではない。マニラ貿易に投資し、貿易活動を推進したのはメキシコ在住の大商人たちであった。東洋の商品で船腹を満たしてアカプルコに帰港する「中国の船」*Naos de China* はメキシコの貴族社会に東洋への豪華な幻想と狂熱を喚び起こしただけでなくメキシコの大商人に、対セビリャ貿易以上の利潤を与えた。いまやメキシコはペラ・クルスを支配する大西洋の港であり、同じようにアカプルコを支配する大西洋の港であった。そのうえ、マニラにおける「中国貿易」もマニラに住むスペイン商人でなくアカプルコ貿易の延長としてメキシコ大商人の手中に握られていた。⁽¹⁰⁾

十六世紀後半にはスペイン植民地征服の時代は終り、両副王領の行政機構も次第に拡充され、増大した植民者人口と植民地の経済的発展はヨーロッパ商船への需要を着実に膨張させ、それらの対価として支払われる銀の生産は水銀を使用する新精練技術の採用と相俟って急速に増大した。ことに、七〇年代中葉以降ペルー王副領のポトシ銀山開発が進み、メキシコ（サカテカス、グワナファト）時代に代って、植民地銀山開発の最盛期「ポトシ時代」が出現した。ポトシの人口は一五八〇年には十二万人、一六五〇年には十六万人とセビリヤをも凌駕し、スペイン領植民地最大の都市となった。しかし、ポトシ銀山が産む巨大な富と利益を吸い上げたのはポトシに住む鉱山経営者ではなくて、リマに在住する貿易業者や多数のインディオ労働者を銀山へ提供するエンコメンデロたちであった。⁽¹¹⁾ペルー副王領の首都リマには植民地とポトシを支配しその利潤や報酬を吸収する植民地貴族社会が形成され、このヨーロッパからもっとも遠い辺境にある都市リマに大学、異端審問所、劇場などのヨーロッパ文化とヨーロッパ風生活が移植され、ヨーロッパの産物、嗜好品への激しい欲求と需要が生じた。マニラ船団の舶載する東洋の商品が彼らの好奇心と欲望を刺戟したのは言うまでもない。⁽¹²⁾ポトシの銀はアレキパあるいはアリカを経てパナマ地峡に運ばれ、地峡を横断して大西洋側の港プエルト・ベリヨの大都市で本国の輸出品と交換された。しかし、本国からの輸入品は増大したペルー移住者の需要を満たすことができず、北方副王領からの供給が不足を補った。もともとペルー副王領建設の根拠地になったのはメキシコだった。最初の

征服者と移住者がメキシコから送られ、彼らの必要とする食料や衣料その他の必需品がその後続いた。北方副王領の工業製品は不足するヨーロッパ製品の代替物としてペルー白人社会に歓迎された結果、十六世紀中葉にはメキシコ・ウァトゥルコ（テワンペク近傍）・カリャオ（カヤオ）・リマの交易路による南北貿易が活発化した。十六世紀中葉まで続いたペルーの内乱や世紀後半における銀の大量産出によって絶えず高い物価水準を維持したペルーはメキシコ商人にとってとりわけ有利な利潤を与える市場であった。⁽¹³⁾

一五七〇年代のマニラ貿易はウァトゥルコに代ってアカプルコを太平洋岸随一の港に押し上げ、八五年以降はメキシコ・アカプルコ・カリャオ・リマが南北枢軸の交通路となった。驟馬の背に織物や日用品を積んで山を下るヌエバ・エスパニーアの商人と銀やワインを積んだペルーの船が、毎年マニラ船団の入港するアカプルコの大市を目ざして集った。アカプルコはいまや南北貿易の市場であるとともに中国商品の再輸出市場であり、中国商品の大半はメキシコに送られず、アカプルコからカリャオに再輸出された。そしてアカプルコ大市での取引を組織し推進したのは、前述したように、メキシコの大商人あるいは彼らの代理人であった。⁽¹⁴⁾こうして、すでにペルー市場を支配していたメキシコの大商人はマニラとリマのあいだに中継貿易を確立し、マニラとスペイン本国の貿易を奪い、ウォーラーasteインの指摘するようにメキシコはペルーを「植民地化」し、植民地が植民地をもつ二次的帝国主義とでもよぶべき現象が生じた。いまやマニラ経由でペルーへ中

表二 中国およびヌエバ・エスパーニャの絹・生糸輸入量（セビリャ港）

年次	数量 (リブラ)	価格 (マラベディス)	総価額 (マラベディス)
1581	6,388	1,037	6,624,356
1589	15,371	1,000	15,371,000
1593	6,082	1,000	6,082,000
1595	6,291	1,111	6,821,722
1604	13,600	1,200	16,320,000
1606	15,413	1,200	18,496,000
1609	17,265	1,400	24,171,824
1610	2,599	1,466	3,810,134
1611	44,000	1,450	63,800,000
1612	43,750	1,360	59,500,000
1613	90,921	1,000	90,921,000
1614	30,700	1,700	52,190,000
1615	68,945	1,000	68,945,000
1616	29,579	800	23,663,200
1617	12,400	1,000	12,400,000
1618	103,000	1,360	140,080,000

P. Chaunu, Seville et l'Atlantique, Tome VI₂ p. 1020より引用

国商品をもたらすアカプルコの中継貿易は植民地貿易の幹線にさ
えな⁽¹⁵⁾った。

植民地相互間の貿易はセビリャの輸出する本国製品の市場を縮
小させ、さらにマニラ貿易はいままでセビリャに流入していたペ
ルー産銀のかなりの部分を中国に流出させ、他方でメキシコ在住
の大商人の手中に利潤として滞留させる結果を招いた。またポト
シの銀生産額は十六世紀最後の二十年間に至って絶頂に達したけ
れども、副王領の設置とその発展は植民地行政費用をいよいよ増
大させて本国への銀輸送を減少させた。かくして一五九三年、一
月十一日、セビリャとエル・エスコリアル宮廷のブリオニストた
ちはペルーとフィリピン⁽¹⁶⁾の直接交易を禁止し、ペルーからの銀輸
出額を五〇万ペソ、中国商品の輸入額を二五万ペソに、さらにマ
ニラアカプルコ間のガレオン船団を三〇〇トンの船二隻に制限
した。これらの禁止や制限にもかかわらず、中国生糸の流入と銀
の流出はいよいよ増大し、一六〇〇年ごろにはペルーから北方副
王領への銀輸送は一五〇〇万ペソに達し、その大部分は中国商品
の対価として支払われた。スペイン側は禁止・制限令を繰り返
し、監視を強化して植民地間貿易の排除と密貿易の阻止につとめ
た。一六〇四年、マニラ航行船は三〇〇トンから二〇〇トンに引
き下げられ、アカプルコカリヤ間貿易も二〇〇トンの船二隻
に制限された。

アカプルコに舶載される生糸の一部はさらにメキシコ、ベラ・
クルス港を経、船団でセビリャに輸入された(表二)。セビリャ
に到着した生糸は、恐らく、十六世紀にモリスコによって大発展

を遂げたセビリヤやグラナダあるいはトレドの絹織物業の需要を満たしたに違いない。それはともかくマカオ＝マラッカ＝ゴア＝リスボンのポルトガル貿易ルートに対して、いまや第二の海上の絹の道が組織され、ひとときの繁栄の時期を迎えてのち、セビリヤ・スペイン王室、さらにリスボンの敵視、オランダ、イギリスの挑戦、ペルーの銀産出量の減少などによって一六四〇年ごろには死刑を宣告され、やがて忘れ去られた。

註

- (1) 小葉田淳『金銀貿易史の研究』法政大学出版局、一九七六年。一二一—一二七頁。
- (2) P. Chaunu, *Le galeon de Manille, grandeur et decadence d'une route de la soie*, dans E. S. C., p. 450.
- (3) *ibid.*, pp. 452-3.
- (4) Meilink-Roelofs, *op. cit.*, p. 264.
- (5) 小葉田淳、上掲書、一二七—八頁。
- (6) 同上、一二五頁。
- (7) P. Chaunu, *op. cit.*, p. 455.
- (8) P. Chaunu, *Seville et l'Atlantique (1504-1650)*, Tome VIII, Paris, 1959, pp. 794-5.
- (9) *ibid.*, pp. 796-7.
- (10) *ibid.*, p. 734, pp. 756-9.
- (11) *ibid.*, pp. 1124-9.
- (12) *ibid.*, pp. 1135-6.

(13) *ibid.*, pp. 756-758.

(14) P. Chaunu, *Le galeon de Manille*, pp. 453-4.

(15) I. ウォーラー・ステイン著、川北稔訳『近代世界システムⅡ』岩波現代選書、一九八一年。

(16) P. Chaunu, *Le galeon de Manille*, p. 458-9.

(三) ポルトガル、オランダ

本国スペインの意に反して、マニラ貿易や中南米植民地内部の貿易が展開したように、アジアのポルトガル人にとってアジア間貿易がいつそう重要性を増した。彼らは本国と縁を切り、軍事的・政治的自立傾向を次第に強め、本国ポルトガル人との利害対立を激化させた。⁽¹⁾ ショーニュによれば、マカオのポルトガル商人は一六〇四年に初めて大量の生糸をフィリピンに輸入し、以後、三隻(〇五年)⁽²⁾、四隻(〇六年)、五隻(〇七年)と毎年大型船をマニラに送った。こうして、マカオのポルトガル人にとって、マカオの危険な競争相手だったマニラは、いまや、マラッカよりも近くて安全なうえに、巨大な需要と豊富な現銀を併せ有する市場として立ち現われた。

マカオのポルトガル人に対マニラ貿易を開始させた直接の契機は、しかしながら、オランダ人のアジア進出であった。一六〇二年の会社創設後、最初に派遣されたファン・ワールウェイク指揮の船隊は早くもマラッカ海峡の入口を扼すジョホール前でポルトガル艦隊を攻撃した。後続のオランダ船隊もマライ・インドネ

シア海域でポルトガル船を見つけ次第攻撃を加えて掠奪し、さらに、西部ジャワのバンテンでポルトガル人を駆逐して商館を建てたのを手初めに、各地に商館を建設した。⁽³⁾ポルトガル人が一世紀にわたり、営々と築き上げたアジア貿易網、とりわけモルッカ諸島乃至マカオからマラッカ、ゴアに達する幹線ルートは僅か数年のうちにはオランダ船隊によって寸断された。したがってマラッカ港から分断されたマカオはマニラ貿易にとつて死中に活を求めたと言える。表二が示すように、一六〇四—一八八年のあいだに、ベラ・クルスからセゼリヤへの生糸輸入量はまさに奔流の勢いで増大した。表二が示すセゼリヤ港への輸入生糸はヌエバ・エスパ—ニヤ産および中国産の生糸を含み、両者の割合は不明である。ヌエバ・エスパ—ニヤの各地、ことにミステカン地域では十六世紀中葉ごろ養蚕業が大発展を遂げ、メキシコ、プエブラ、アンテクエラに絹織物業を発展させ、さらにスペインへの生糸輸出を行なうに至らせた。しかし、八〇年以降、安い中国生糸の輸入によってミステカンの生糸生産は衰滅し、生糸輸出も急激に減少し、したがって十七世紀以降のセゼリヤへの生糸輸入の殆んどは中国生糸によって占められていたと考えられる。⁽⁴⁾表二はまた一六一八年以後の生糸輸入について何も語っていないが、一六〇四年以降の急上昇のトレンドは外的条件の変化がない限り一八年以降も継続すると考えてよいだろう。しかし、まさにこの頃からポルトガル人によるマニラへの中国生糸輸入に対して、オランダ人の本格的な攻撃が始まったのである。

希望峰以東海域の排他的な領有を主張するポルトガルがスペイ

ンと合併したとき、オランダとイギリスは公然たる敵国ポルトガルに植民地戦争を仕かけた。オランダは一五九八—九年、アフリカ西岸のプリンシペ、サン・トメの両島を手初めにアフリカ、アジア、ブラジルにおけるポルトガルの拠点をつぎつぎに包圍攻撃した。⁽⁵⁾スペイン植民地が内陸型植民地だったのに対して、ポルトガル人の居留地、商館、要塞は貿易活動の根拠地として海岸に位置していたから海上からの攻撃にはきわめて脆かった。ボクサー氏の要約によれば、オランダの対ポルトガル植民地戦争の目的はアジアの胡椒貿易、西アフリカの奴隷貿易、ブラジルの砂糖貿易への挑戦という形をとり、結果として、オランダはアジアで勝利を占め、西アフリカで撤収し、ブラジルでは敗退した。⁽⁶⁾ところでボクサー氏の要約するアジアの胡椒貿易にはさらに生糸をつけ加えてよいだろう。

香料諸島やジャカルタにおいて胡椒貿易の独占を目ざしイギリス人と激しく争っていたオランダ東インド会社に対して、一六一九年、オランダ連邦議会はイギリス東インド会社と協定を締結することを指示した。一六〇九年にスペインとのあいだに結んだ十二年間の休戦がまさに満期を迎えようとしており、対スペイン戦争再開を目前に控えたオランダはアジアにおいてイギリスとの一時的な休戦を余儀なくされたからである。この協定によって、両会社はおの自由な貿易活動に従事するが、価格競争はせず、共同購入によって買い入れたものを半分ずつ分け、また香料貿易に関してはオランダ側が三分の二、イギリス側が三分の一を取ることが定められ、さらに戦争のために共同防衛会議を設けること

が定められた。⁽⁷⁾

一六二〇年六月十三日、この防衛会議が蘭英各五隻、オランダ、イギリス人、各六〇〇人の乗組員から成る連合艦隊に与えた指令書は、これら蘭英両国一〇隻の船にまず平戸へ結集すること
を命じ、一六二一年一月一日ごろ全艦隊を連らねて日本からマニラ湾に向い、マニラ湾を占領すること、また日本で求め得られるならば、さらにヤハト船あるいはジャンク船二隻を艦隊に追加し、一隻をマニラ湾の北に、他の一隻は湾の南に止めておき、中国からの、あるいはマニラからのジャンク船を掠奪すること、さらに中国からのジャンク船を待ち伏せして六月末乃至それ以後まで全艦隊がマニラ近傍に止まることを訓令している。⁽⁸⁾

防衛会議はマニラ包囲艦隊への指令書に先だち、五月三十日、一〇隻のうち四隻（蘭英各二隻）に、マカオから長崎に向けて航行中のポルトガル船を逮捕する目的をもって平戸に向けて先発することを命じている。指令書はまた、海上のいずれの地点においても、ポルトガル人、スペイン人を船上に発見した場合は直ちにこれを攻撃掠奪すべきこと、また上記両国人以外の中国人、日本人その他は如何なる場合たりとも傷ついたり、その船舶、財産を毀損してはならないこと、しかしながらマニラに向い、またマニラから還る中国ジャンク船に遭遇した場合はこれを掠奪の目的で攻撃してよいが、日本向けの中国船は攻撃してはならず、またポルトガル船が日本海岸に遁航し船着場または港に入った場合はその船の投錨を許してはならないことなどを詳細に規定している。⁽⁹⁾

一六二二年オランダ艦隊はポルトガル人生糸貿易の最大拠点マ

カオを猛襲したが、逆に大損害を蒙った。オランダはマラッカ（四一年）、セイロン（三八―五八年）、マカッサル（六七年）、コチン・マラバル海岸（六三年）を占領し、東南アジアの天地からポルトガル人を駆逐したが、マカオはついにポルトガル人の手に残った。しかし翌二三年、オランダがタイオワンに要塞を築くと、マカオとマニラのあいだの交通は致命的打撃を与えられた。南シナ海におけるオランダの勢力に脅かされて、中国人もポルトガル人も装備を持たない大型ジャンク船を廃して、軽くて逃げ足の早い一〇―二〇トンのジャンク船を用いるようになった。⁽¹⁰⁾

他方、マカオのマニラ貿易の繁栄はマラッカ、ゴア、リスボンの対中国貿易を縮小させ、その利潤を奪った。リスボンの商人はポルトガルの経済的苦境の原因をオランダ人とマニラ貿易に見出し、その植民地貿易をめぐって激しく競争し敵対してきたセビリヤとともにマニラ貿易反対を国王に訴え続けた。フィリピン植民地はスペイン人の求めた胡椒、香料、貴金属を生産せず、住民に対する苛烈な搾取も行政費を賄うのには不足し、内乱も絶えなかったこともあって、国王側近にはマニラ貿易反対、さらにフィリピン放棄の強硬論を唱える者まであった。⁽¹¹⁾

一六三〇年代に入ると新大陸からセビリヤへの銀輸入量は急に減少した。その理由はメキシコ、ペルー植民地における銀山の枯竭、苛酷な鉱内労働と疫病による原住民労働力の急減、植民地密貿易、経済発展による貨幣需要の増加、行政費の増大などに帰せられるが、⁽¹²⁾いづれにせよ銀の決定的不足によって、アカプルコはマニラ船団に十分な銀を供給することができなかった。ポルトガ

ルのスペインからの独立がマカオのマニラ貿易に終止符を打った。

註

- (1) I・ウォーラーステイン、上掲書、二五四頁。
- (2) P. Chaunu, *Le galeon de Manille*, p. 458.
- (3) A・J・エイクマン、F・W・スターペル著、村上直次郎、原徹郎訳『蘭領印度史』東亜研究所、一九四二年、四八頁。
- (4) P. Chaunu, *Seville et l'Atlantique*, pp. 741-744.
- (5) C. R. Boxer, *The Portuguese Seaborne Empire 1415-1825*, London, 1977. pp. 109-111.
- (6) *ibid.* p. 110.
- (7) 永積昭『オランダ東インド会社』近藤出版社、世界史研究双書、七四頁。
- (8) オスカー・ナホッド、上掲書、三三八―三四二頁。
- (9) 同上、三三五―三三八頁。
- (10) Meilink-Roerofs, p. 264.
- (11) P. Chaunu, *Le galeon de Manille*, p. 459.
- (12) 近藤仁之「スペイン經濟の盛衰」『講座西洋經濟史』第一卷、同文館、一九七九年）一三七頁。

むすび

マニラに通航する中国やマカオの船あるいはマニラに対するオランダ船隊の攻撃や封鎖は一六二〇年代以降も執拗に続けられた（フィリピン攻撃は四八年のミュンスター和約まで続いた）。その目的はひとつにはマニラ政庁にとって巨額の関税収入の源泉である貿易をたたきつぶすことにあった。東インド総督クーンの推定では生糸の輸出関税だけ約五〇万レアルに達した。この関税収入によって維持されるマニラのスペイン船隊は南シナ海でオランダ船に敵対したばかりでなく、オランダのモルッカ諸島支配を絶えず脅かした。ポルトガルはスペイン艦隊の援護のもとに北部モルッカ諸島の植民地を一六二二年まで保持することができたのである。

オランダのマニラ攻撃の目的がまた日本市場向けの中国生糸入手にあったことは前述した通りである。しかし、さらに一般的に言えば、オランダ人はマニラの方へ顔を向けている中国人商人を初めはバンテンへ、二〇年代以後はバタビヤへと引きつけること、そのことによってバタビヤを出会貿易のための一大貿易港に成長させようとしたのであった。オランダ人はマニラへの中国船を攻撃する一方、バタビヤへ来航する中国船には護衛船をつけて中国の海賊船、イギリス船などの襲撃から保護した。バタビヤでは中国人商人に対しては関税の半額が免除され、中国人移住者の定住に最大の便宜が与えられた。

周知のように東インド会社はアジア貿易を行うために多額の金・銀を要した。そして会社は日本市場において中国生系の対価として巨額の銀を入手することができた。したがって一六六七年日本が銀輸出を禁止するまで、会社の対日貿易はアジア貿易において中枢的な意義を有した。会社が日本からえる銀はときに本国からの銀輸送額を超過した。したがって、会社が買い入れた生系の大部分は銀と交換するため日本に送られ、本国からの需要があり、より大きな利潤が予想されても、在日商館の求めがある限り優先された。一六二〇年会社はペルシアの商館で本国向け生系の買い付けを試みたが、王室の貿易独占のため、充分の利潤がえられなかった。十七世紀中葉、会社は中国、ペルシャ生系に較べて低廉なベンガル生系の買い付けを始め、イギリス人と競って最初は優位にあったが、十八世紀に入って敗れた。しかしこれらのヨーロッパへの生系輸入については機会を改めて考察したい。